

コメントライナー

第6886号

2020年1月9日(木)

安倍首相の話しぶり、5年前と比べると

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆時々流れがちになる発音

憲政史上最長となった安倍政権。支持率を揺るがす問題も少なくないが、国民に向けて発せられる安倍首相の声と言葉は数年前と比べて変化があるのか。わかりやすい例として1月6日に行われた年頭記者会見を5年前のものと比較してみた。

まず、話す速さ。2015年の年頭会見は約7分間の冒頭部分で1分あたり約235文字程度。新年を意識したのか普段よりゆっくりペースで、落ち着いた余裕を感じさせる話し方だった。ともすれば流れがちな発音も、意識的に丁寧に発音しており、明瞭で歯切れよい話し方で新春らしい新鮮な印象を持った。

今回は冒頭部分は約10分20秒、1分あたりの文字数は約250文字。普段の記者会見とほぼ同じ速さで、やはり少々音が曖昧に聞こえるところがあった。

細かい話だが、「安全」「半年」のような撥音「ん」が入る言葉が「あーぜん」「はーとし」、「自衛隊」「北朝鮮」「地平」のように母音の「い」で始まる言葉の第一音が弱く、「じえーたい」「(き)たーちようせん」、「ちえーい」に。「我が国」「さらに」のように同じ母音「あ」が続く音が「わーくに」「さあに」と流れがちになる。

◆センテンスの長さと言のメリハリ

文章は一文(何がどうした)が、15文字から45文字程度とコンパクトに収まっている。長くなりそうな文章は途中で一旦「～が～した。これは」と軽く止めるなど、ワンセンテンスにワンメッセージの聞き手にわかりやすい組み立てである。と同時に、話し手にとっては、自然な息遣いで無理なく楽に話せる長さであり、安定したリズム感が生まれるという効果がある。

ただ、安定しすぎは退屈さにもつながる。話のヤマ場で長めの文を大きな息遣いで一息で語るなど、緩急をつけることで聞き手をより引きこむことができる。言のメリハリという点では、5年前の方がキーワードで声を張り気味にし、間を取って話すなどの効果が際立っていた。

◆視線の動きとジェスチャー

視線は5年前と同じく、冒頭部分はカメラを意識しすぎて落ち着かない。全体に目を配っているように、定まらない印象を与えてしまうのは、視線を止める時間が短すぎるからである。最短で3秒、長くても5.6秒毎、どうやら読点ごとに視線を上半身ごと(おへそを起点に)左、右、中央と振っている。撮影への配慮であろうが、落ち着いて話が聞けないので、せめて一文を言い終わるまでは止めてほしい。後半になると、視線を振る間隔が少し長めになり、見ていて安心できた。

また、以前に比べジェスチャーが増えていた。ジェスチャーとコメント内容がところどころ一致しない違和感があるが、このときにカメラのシャッター音が大きくなるのでシャッターチャンスと意識した上で頻度を考え、取り入れていることがわかる。

今回の会見から信頼を得るスピーチのヒントを学ぶとすれば、「何を話すかが決まったら、どう伝えるか、話し方の戦略も立てよう」「一文は短く、が聞き手も話し手もラク」「一番伝えたい部分は長めの文になっても良い。熱い思いと勢いを大事に」「視線を振るときは止めを意識」「ジェスチャーは言葉のイメージとあった動きを」「話し始めやキーワードの言葉はゆっくり、伸ばす音、跳ねる音は特に丁寧に」ということである。ご参考までに。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003